

京都大学	博士 (工 学)	氏名	Fabian Jander
論文題目	Culturally Friendly Design Method based on Machiya System of Kyoto (京都の町家システムに基づく文化親和型の設計方法に関する研究)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、京都の町家システムに基づいて、文化的価値と持続可能性を有する建築の設計方法を構築することを目指して、町家システムの空間構成（環境的側面）と居住者の生活行動（文化的側面）、及び両者の関係性を明らかにするために、C.S.パースの記号論に基づいて、その構文論的、意味論的、実用論的次元について調査と分析を行ったものである。研究の特色は、物理的空間よりも居住者の居住や解釈に焦点を結ぶアプローチを展開している点にある。本論文は以下に示す7章からなる。</p> <p>第1章の序論では、研究の背景と目的、既往研究との関連、論文の構成をまとめている。</p> <p>第2章では、主要な話題である町家、建築と建築作品、倫理学と美学等の基本的定義について説明し、本研究の理論的枠組をまとめている。本論文では、建築を居住者の解釈に基づいて理解し、空間あるいは居住者に還元できないものとみなしている。そして、町家では美的原理が文化的価値に対応しており、町家居住は文化的価値によって支配されているがゆえに、そのような文化的価値は町家空間における美的要素に表現された倫理的価値に対応していることを指摘している。</p> <p>第3章は、研究方法についての説明である。建築を居住者の解釈に基づいて理解するためには、適切な分析方法を工夫する必要がある。空間形態の代わりに居住に基づいて建築を分析する手法として、まず行動を頂点とし、行動を結ぶ境界的要素を辺とするグラフを用いる構文論的分析 (syntactic analysis) を導入している。次いで町家の意味論的次元に注目した意味論的分析 (semantic analysis) を行っている。具体的には、表一裏、ハレーケといった伝統的概念から導出された形式的・日常的、私的・公的といった町家の空間配置と結びついた形式性 (formality) とプライバシー (privacy) の次元、さらに明るさ (brightness) と自然性 (naturalness) という次元を導入し、以後の意味論的分析の基盤としている。</p> <p>第4章では、類似・指標・象徴という記号分類に対応する物理的パラメータを用いて、個々の建物にどのくらい周辺のコンテクストが現れているかを表す「コンテクスチュアル・スコア」を構成し、それを用いて京都の歴史的地区における町家の物理的コンテクストの分析を行っている。物理的空間の記述の代わりに、居住によって定義される指標記号に焦点を結ぶことによって、それらが町家システムのコンテクストを定義するのに効果的なパラメータとなりうることを示している。</p> <p>第5章では、町家の建築空間が、物理的3次元空間の構文論的次元の代わりに、4つの意味論的次元 (formality, privacy, brightness, naturalness) を用いて記述できることを示している。居住は空間の意味を理解すること、すなわち解釈に基づいているがゆえに、意味論的次元に対応する指標として使用できるからである。具体的には、意味論的次元を踏まえて、13種類の生活行動の現状と将来について、町家及びその他のタイプの住居に住む居住者に対して質問紙調査を行い、得られた回答に基づいて、現</p>			

京都大学	博士 (工 学)	氏名	Fabian Jander
<p>状と将来について分析を行った結果、現代の居住者は他のタイプの住居に住む場合でも、伝統的な町家の意味論的構造を認識できることを明らかにしている。しかし同時に、既存の町家の意味論的空間と、町家に住みたいと言っている人々が好む居住タイプとの間には不一致が存在することも指摘している。このことは、居住者が町家の意味論的空間を認識できるとしても、彼らが必ずしも伝統的な町家に住みたいと考えているとは言えないことを意味している。居住に対する好みについては既存のコンテキストの影響が大きいからである。</p> <p>第 6 章では、物理的側面と文化的側面の両面から、町家と改変された町家の個別事例の実用論的分析 (pragmatic analysis) を行っている。その結果、意味論的な性質がそれぞれの事例の固有性とコンテキストを規定するのに対して、構文論的な性質が特殊性を規定することを発見している。また、物理的改変の影響と居住者の解釈の影響とを区別できるが、どちらも建物を規定する要因となり得ることを示している。さらに、一人の居住者が独自のやり方で伝統的な文化的価値を実践することを通して、どのようにして町家の文化的背景に貢献できるかについても明らかにしている。</p> <p>第 7 章は結論であり、各章のまとめと本論文で得られた成果を要約するとともに、それに基づく建築家の役割と建築作品のあり方についての議論を展開している。</p> <p>以上を通して、文化親和型建築は物理的類似性よりも意味論的秩序によって定義されると結論づけている。それゆえ、設計プロセスでは居住者が能動的役割を果たす必要があり、その結果、設計プロセスは個々の建物の建設によって終始するものではなく、連続的なプロセスとなり、マクロな文化的プロセスの中に組み込まれることになるのである。こうした意味論的次元に基づく設計方法が、新しい町家を創造しようとする人々に対して、魅力的な伝統的建築を生成してきた無意識的プロセスを意図的に展開することを可能にしてくれるわけである。</p> <p>本論文では、このような方法を「京都の町家システムに基づく文化親和型の設計方法」(Culturally Friendly Design Method) として提示するとともに、倫理的価値 (意味論的次元) の美的表現を分析し、町家の意味論的次元を創造する設計方法の可能性についても検討している。</p>			

氏名	Fabian Jander
----	---------------

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、京都の町家システムに基づいて、文化的価値と持続可能性を有する建築の設計方法を構築することを目指して、町家システムの空間構成（環境的側面）と居住者の生活行動（文化的側面）、及び両者の関係性を明らかにするために、記号論に基づいて、構文論的・意味論的・実用論的次元について調査と分析を行ったものであり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. 居住システム（inhabitation system）としての建築に焦点を結び、建築を物理的ユニットに対応するものではなく、居住（生活行動）の仕方に対応するシステムとして理解する立場から、町家システムの設計プロセスを記号連鎖（semiotic stream）として理解することにより、文化的価値と持続可能性を有する建築の設計方法を構築する理論的枠組を提示した。
2. 類似・指標・象徴という記号分類に対応する物理的パラメータを用いて、個々の建物にどの程度周辺のコンテクストが現れているかを表す「コンテクスチュアル・スコア」を作成し、京都の歴史的地区における町家の物理的コンテクストの分析を行い、居住によって定義される指標記号が町家システムのコンテクストを定義する効果的なパラメータとなり得ることを明らかにした。
3. 居住システムに基づく建築の分析手法として、生活行動をグラフに置換する構文論的分析と、形式性（formality）・プライバシー（privacy）・明るさ（brightness）・自然性（naturalness）という4つの次元に導入した意味論的分析を考案し、町家を含む様々なタイプの住居に住まう居住者を対象として質問紙調査を行い、居住システムの現状と将来像の視点から新たな建築の可能性を提示した。
4. 物理的側面と文化的側面の両面から、町家と改変された町家の個別事例の実用論的分析を行い、①意味論的性質が事例の固有性とコンテクストを規定するのに対して、構文論的性質が特殊性を規定すること、②物理的改変の影響と居住者の解釈の影響はいずれも建物を規定する要因となり得ること、③居住者の住まい方が町家の文化的発展に貢献する可能性があることなどを明らかにした。
5. 文化親和型建築は、物理的類似性よりも意味論的秩序によって定義されることから、居住者が設計プロセスで能動的役割を果たす必要があり、その結果、設計プロセスは個々の建物の建設によって終始するのではなく、連続的なプロセスとなり、マクロな文化的プロセスの中に組み込まれることを指摘し、「文化親和型の設計方法」（Culturally Friendly Design Method）を提案した。

以上、本論文は、京都の町家システムを中心に現代社会に存在する様々な住居タイプについて、居住システムの視点から建築を探求する意味論的次元に基づく設計方法を探求したものであり、学術上、実際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成25年2月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。